

2016・新年号

映画に
宛てた
ラブ
レター

天見谷行人

新年ご挨拶

新年ご挨拶

皆さま、あけましておめでとうございます。

「映画に宛てたラブレター」を毎号お読みいただいている皆さまへ、そして、新たにこの小冊子をお読みいただく皆さまへ、感謝を込めて、新年のお慶びを申し上げます。

「映画に宛てたラブレター2016年 新年号」をお届けさせていただきます。

このところ世情は、大変生きづらい、しかも危険な雰囲気になりつつある気がします。

50年後の歴史家が、この2016年を、戦争前夜と位置付けることが決してないように、この時代の流れの中で、一人一人がどう生きたのか？ が問われる一年になろうかと思えます。

映画は紛れもなく世相を反映します。

今年一年どんな映画に出会えるのか？

どんな映画が生み出されるのか？

不安交じりに劇場のスクリーンを注視していきたいと思えます。

天見谷行人

なお、[天見谷行人オフィシャルブログ](#)

[天見谷行人Facebook](#)

そして、「唄う物書き」アマミヤユキトとして[YouTubeにて楽曲](#)も披露しております。こちらもよろしくお願いいたします。

顔のないヒトラーたち

顔のないヒトラーたち

2015年12月3日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

「悪」は常に平凡な者を狙う。

罪を犯した個人が、自分を客観的に見つめることは、それだけで勇気がいる。

ましてや、国家ぐるみの戦争犯罪を、国家が率直に認めることは、なおさら難しい。ドイツはそれをやってのけた。

うがった見方をすれば、ドイツにはヒトラーという「独裁者」圧倒的な「ワルモノ」がいたことで、反省を早期に促す、ある種の触媒になったのではないだろうか？

ヒトラーという、人類史上類を見ない独裁者に罪を被せることで、ドイツは贖罪をしやすい土壌がすでにあったのかもしれない……と僕は、勝手にそう思い込んでいた。

ところが、本作を鑑賞してびっくりした。

本作で描かれる1950~1960年代。当時の西ドイツでは、けっして国全体で戦争犯罪を見つめようとする姿勢は、まだなかったことが伺い知れるのである。

というのも、その頃まだナチスに加担した人は存命であり、その数、なんと数千人。ごく普通の「善良な市民」として、ドイツ国内に紛れ込んでいたのである。

本作は、新米の裁判所検事ヨハンが、かつての「ナチス」党員の、アウシュヴィッツでの犯罪を徹底的に追及してゆく、というストーリーである。これは事実に基づいたセミ・ドキュメンタリーだ。



主人公の若い検察官ヨハン。彼にまわってくる事件、案件は、せいぜい交通違反の罰金をいくらにするか？ などという小さな案件ばかりだ。

なにせ彼はまだ検察官になりたて、ペーペーの新人なのだ。お役所の中にあって、最も低いヒエラルキー、ポジションしか与えられていない。

ある日、ヨハンは新聞記者グルニカから、一つの情報を知らされる。

「元ナチの親衛隊員が教員をやってるんだ、こんなこと許されていていいのか？！ そいつは元、どこにいたと思う？ あの Ауシュヴィッツだぜ」

このとき1958年、戦後すでに13年が経ち、ドイツの人々は、あの忌まわしい戦争を忘れよう、と
していたのが、本作からうかがえる。

なんと当時、ドイツの若者の多くは「アウシュヴィッツ」という象徴的な「単語」さえ知らない者が多かったらしい。

グルニカからの有力情報は、お役所の中では誰も相手にされなかった。

しかし、ヨハンは若さゆえの正義感からだろうか、この新聞記者の告発を調べてみようと思いつく。

しかし、それはまさに決して開けてはならない「パンドラの箱」「迷宮」「地獄への入り口」に他ならなかった。

ヨハンはまったくそれに気がつかずに、そのドアを開けてしまったのである。

ナチス容疑者の内偵を密かに進める、主人公ヨハン達検察チーム。

かつてのナチ党員は、ある者は学校教師として勤め、ある者は街のパン屋さんとして実直に働いている。

ニコニコしながら美味しいパンを焼く職人さん。この好人物が、まさか元ナチス黨員とは誰も思わないだろう。

しかしアウシュヴィッツ強制収容所で、幼い子供を壁に何度もぶつけ、なぶり殺しにしたのは、今パンを運んでいる、まさにこの男なのだ。

また、大量のユダヤ人をガス室に送り込んでいた男が、いまや教師として平然と勤務していたりする。

やがて、この「アウシュヴィッツ」を巡る事件は、西ドイツに住む人々、ほぼすべての人が「ナチスに加担していた疑いがある」という問題に発展してゆく。ヨハンはやがて自分の父や母でさえ「ナチスの協力者」ではなかったか？ という壁にぶち当たる。

「しょうがないじゃない、そういう時代だったんだから！！」

誰もがそういう。ヨハンの恋人さえも。

だが、ヨハンには心強い味方がいた。

職場のトップ。首席検事バウアーである。

彼はユダヤ人だった。

「しっかりしろ、ヨハン。まず被害者と加害者を特定しろ。確実な証拠を掴むのだ。 明らかな犯罪行為を立証するんだ！ 私がこの職にある間にな……」

この事件を引っ掻き回すことは、西ドイツ政府にとってもタブーであったのだ。首席検事バウアーは知っている。いつ自分が左遷されるかもしれないことを。

やがてヨハン達、検察チームは、十数人の容疑者の割り出しに成功。彼らを逮捕し、告訴に踏み切る。

こうして「アウシュヴィッツ裁判」が始まるのである。

しかし、ヨハン達が最も追及したかった男が捕まらない。

それは温厚な医師である。

彼は収容所で双子を選び出す。そして数多くの、おぞましい人体実験を行った。男の名前はヨーゼフ・メンゲレ。別名「死の天使」

1963年12月に始まったこの「アウシュヴィッツ裁判」によって、国家的な犯罪行為が明らかとなる。

本作の公式サイトでは、ドイツのメルケル首相が述べた、追悼式典でのコメントが紹介されている。

「私たちドイツ人は恥の気持ちでいっぱいです。何百万人もの人々を殺害した犯罪を見て見ぬふりをしたのは、ドイツ人自身だったからです。私たちドイツ人は過去を記憶しておく『責任』があります」

時に権力の地位にあるものは、都合の悪い過去を顧みようとしない。更には、「歴史など書き換えてしまえばいい」という、信じられないほど傲慢な態度をとる者もいる。一例を挙げれば、旧日本軍の731部隊については未だに謎の部分が多い。

本作で描かれる、裁判で告訴された被告達。彼らはある種の「みせしめ」に過ぎなかったのかもしれない。

「もっと悪い奴はいる」

おそらく被告達はそう思っていたらう。事実ヨゼフ・メンゲレは、まんまと逃げおおせ、一度も逮捕されることもなく天寿を全うした。死因は水泳中の心臓発作だった。

本作のタイトルは「顔のないヒトラー達」

実は、善良な一般市民、僕も含め人の心の中には当然、すくなくならず「悪」が存在し、残虐性や、攻撃性もある。

そしてなにより、それらは「凡庸な」「普通の」人々の、こころのなかに、そして日常生活の中に、こっそりと潜んでいる、ということである。



ガス室へ送られたのは普通の市民だった。

そしてガス室へ送ったのも、また、「普通の市民」だったのである。

人々の心の中に巣食う「小さな悪魔」をうまくあやつる「扇動者」が出現した時、小さな悪魔はその本性を剥き出しにする。

「巨悪」を平然と行う、「暴力装置」へと変貌するのだ。

その本質は、意思を持たない怪物、別名「群衆」なのである。

以前僕は「[ハンナ・アーレント](#)」という作品を鑑賞した。

ナチスの戦争犯罪者アイヒマンの裁判を傍聴した、哲学者ハンナ・アーレント女史の伝記映画である。ハンナ・アーレントは裁判を傍聴しながら気づく。アイヒマンは中身が空っぽの男なのだ、自分の意思というものがまるでないのだ。

被告席に座る男は、単なるヒトラーの「イエスマン」だったのである。

裁判を傍聴する過程で彼女はやがてひとつの「確信」を得る。

「平凡な市民」の中に巣食う「悪」こそ着目すべきだ、ということ。
それは扇動者に利用されれば、恐るべき「浸透力」「伝染力」を持って「大衆」を瞬く間に支配するのだ。

ハンナ・アーレントは、これを「悪の凡庸さ」と名付けた。

ヒトラーは平凡な男だった、という。

そのあまりの平凡さが「悪のブラックホール」へと大衆を飲み込んでいったのかもしれない。その危険は今も続いている。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ジュリオ・リッチャレツリ

主演 アレクサンダー・フェーリング、フリーデリケ・ベヒト

製作 2014年 ドイツ

上映時間 123分

予告編映像はこちら

[「顔のないヒトラーたち」予告編](#)

黄金のアデーレ 名画の帰還

黄金のアデーレ 名画の帰還

2015年12月14日 [OSシネマズミント神戸](#) にて鑑賞

素材はすべて超一級品なのだが

音楽の都、芸術の都といわれるオーストリア、ウィーン。モーツァルトやベートーヴェンが住んだ街であり、ここで開かれる音楽祭には世界各国から観客が押し寄せる、世界有数の観光都市。そこが故郷なんて、日本人からすると羨ましく思いますね。

だけど、その故郷に、二度と帰りたくない、と思う人物もいるのです。

華やかなウィーン。実は影の顔があります。ウィーンがあまり表に出したくない、忌まわしい過去。

かつてナチスドイツがウィーンを併合したとき。ウィーン市民たちは、あのヒトラーを大歓迎して出迎えました。

やがてウィーンでもユダヤ人の迫害が始まります。

迫害などという生易しいものではなかった実態が、本作でも描かれます。

それはナチスがユダヤ人を「狩りの獲物」のように執拗に追回し、狩っていたのです。

本作については、正直、やや期待しすぎました。

なにせ、主演はエリザベス女王を演じたキャリアを持つ、ヘレン・ミレンですよ！

僕はヘレン・ミレンが演じた「[クイーン](#)」を観ました。

そのとき僕は、精神状態が極めて敏感になっていた時期でした。

上映中、あまりにいたたまれず、途中退席した記憶があります。

それは作品が稚拙だったからではありません。その真逆です。

作品が素晴らしすぎたのです。

ヘレン・ミレン演じる、エリザベスのあまりの孤独、疎外感、その波長が、当時、僕が置かれていた境遇と、まさに振幅がぴったり合ってしまったのです。

小さな振動でも、ある周波数の波長が合うと「共振」という現象が起こります。それは巨大な橋梁でも破壊してしまう巨大な力となります。

僕の精神の中に、まさにその「共振」が起こったのでした。

ヘレン・ミレンの演技によって僕の心が破壊されそうになったのです。

それほどすごい作品であり、名演でした。

そして本作では、作品のモチーフとして、グスタフ・クリムトの傑作と名高い「黄金のアデーレ」という肖像画が登場します。



ナチスによって強奪された、この名画の返還を求めて、主人公マリア・アルトマンがオーストリア政府を相手に訴訟を起こし、ついに名画を取り戻すという、奇跡のような本当の話がベースになっているのです。

セミドキュメンタリー仕立てなのですね。

「事実は小説より奇なり」はまさに真理です。

頭でこねくり回したストーリーより、ドキュメンタリーの方が数百倍も面白い。興味深い。これだけの「美味しい」材料をギュッと映画作品に押し込んだのが本作。

面白くない訳がない！！

とあなたも、思うでしょう？ 僕もそう思ったから観に行きました。

ところが、実際は、残念ながらイマイチでした。

告白すると、前半はうかつにも寝てしまいました。

最大の問題は、編集でしょうね。

映画の後半などは、安物の紙芝居のようにポンポンとストーリーが展開してゆきます。

ヘレン・ミレンの重厚な演技を期待したいところでしたが、これが監督の趣味の問題なのか、意外にあっさりとした味付け。

むしろ素晴らしかったのは、回想シーンにおける、若い頃の主人公。それを演じた、日本ではほとんど知られていない女優さん、タチアナ・マズラニー。

この人は良かったねえ～。ちょっと大竹しのぶさんに似ていますよ。

ナチスの追っ手が迫ってくる。夫と共に、オーストリアからアメリカへ脱出を目指します。隠れては逃げ、隠れては逃げ、あと少しで飛行場までたどり着く、その緊迫感。

ナチは、逃げるユダヤ人相手には平気でピストルを向ける、発砲する。もう、相手を人間とっていないのです。そういうナチスの手から逃避行をする緊迫のシーン。これはよかったですよお〜。

当時、ユダヤ系の人たちがどのような形で、国外へ逃れたのか？ 本当に命がけの逃避行であったことがわかります。

それから、本作において、ヘレン・ミレンが、あえて「ドイツ語訛り」の英語を話していることに、皆さん気づかれましたか？ その辺りはさすがですね。

それから、ウィーンの新聞記者役のダニエル・ブリュール。彼はもう、抜群でしたね。むしろ本作において真実味や、重厚さを与えたのは、彼の存在感が大きかった。彼のドイツ語でのセリフ回し、これが何より作品に緊迫感とリアルさを与えていて素晴らしかった。

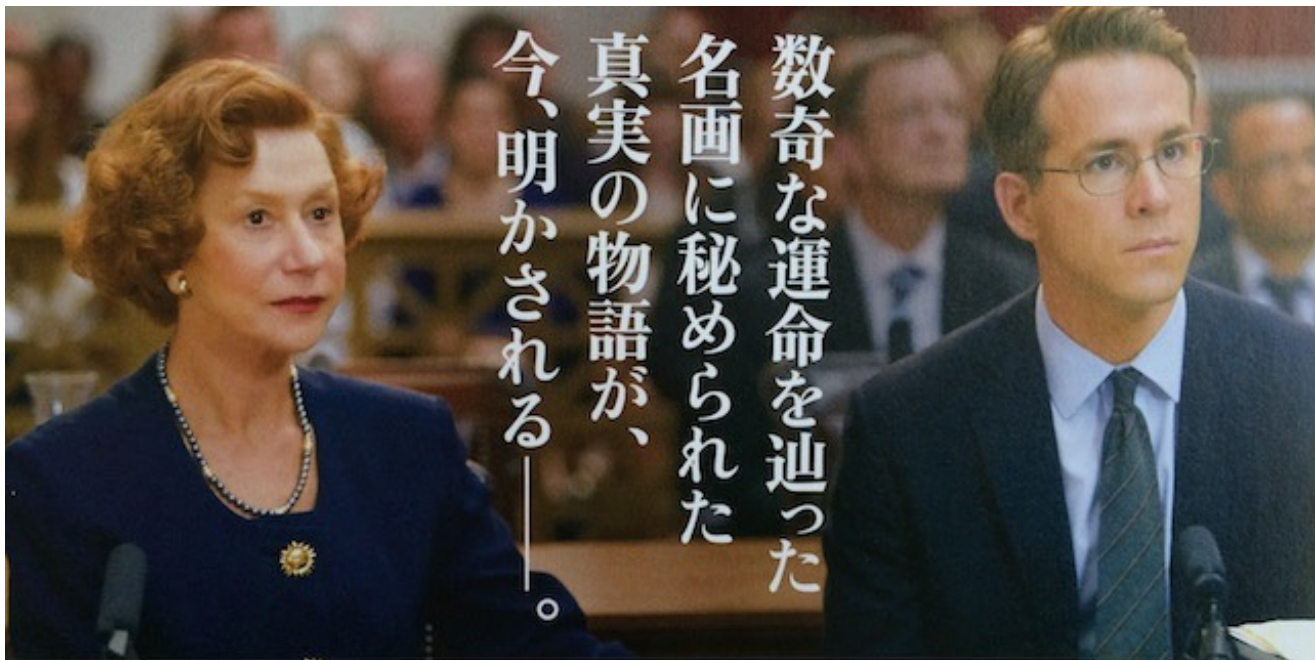
彼の主演した

[「コッホ先生と僕らの革命」](#)

[「ラッシュ／プライドと友情」](#)

どちらも僕は鑑賞しました。素晴らしい俳優さんに成長していますね。

本作では、訴訟を起こすキーマンとなる、若いアメリカ人弁護士、この人は作曲家のシェーンベルグの子孫なんですね。ウィーン政府相手に大胆な訴訟を起こし、一度は挫折を味わうわけですが、その後、アメリカでも訴訟を起こせる、と思いつき、再度アメリカにおいて訴訟を起こします。



82歳の女性と駆け出し弁護士が国を訴えた!?

20世紀が終わる頃、ある裁判のニュースが世界を仰天させた。アメリカに暮らすマリア・アルトマン(82歳)が、オーストリア政府を訴えたのだ。"オーストリアのモナリザ"と称えられ、国の美術館に飾られてきたクリムトの名画(黄金の阿德レー)を、「私に返してほしい」という驚きの要求だった。伯母・阿德レーの肖像画は、第二次世界大戦中、ナチスに略奪されたもので、正当な持ち主である自分のもとに戻して欲しいというのが、彼女の主張だった。共に立ち上がったのは、駆け出し弁護士のランディ。対するオーストリア政府は、真っ向から反



この辺りの彼の複雑な心境、自分の出自、そして、もう一度訴訟を起こそうと決意する、そのあたりの心の揺れ動き、一つの国を相手に一個人が訴訟を起こすという、極めてレアなケースの訴

訟を、「どうしてもやり抜くんだ」という決意。それが、どうして彼の心の中で生じたのか？
その動機をうまく表現できないもどかしさを感じてしまいました。このあたりがちょっと残念。
さらには「黄金のアデーレ」という名画、とクリムトという絵画界の大スター、これをもう少し
掘り下げて描いても良かったのでは？ と美術ファンなら思うところなのです。その辺りに食い
足りなさを感じてしまう作品でありました。

いやあ～、作品を構成する素材はすべて超一級品ばかりだったからこそ、それを生かしきれな
かったのは、残念でなりませんでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 サイモン・カーチス

主演 ヘレン・ミレン、ライアン・レイノルズ

製作 2015年 アメリカ、イギリス合作

上映時間 109分

予告編映像はこちら

[「黄金のアデーレ 名画の帰還」予告編](#)

天皇と軍隊

2015年12月18日 [神戸アートビレッジセンター](#) にて鑑賞

身悶えしながら考える天皇制

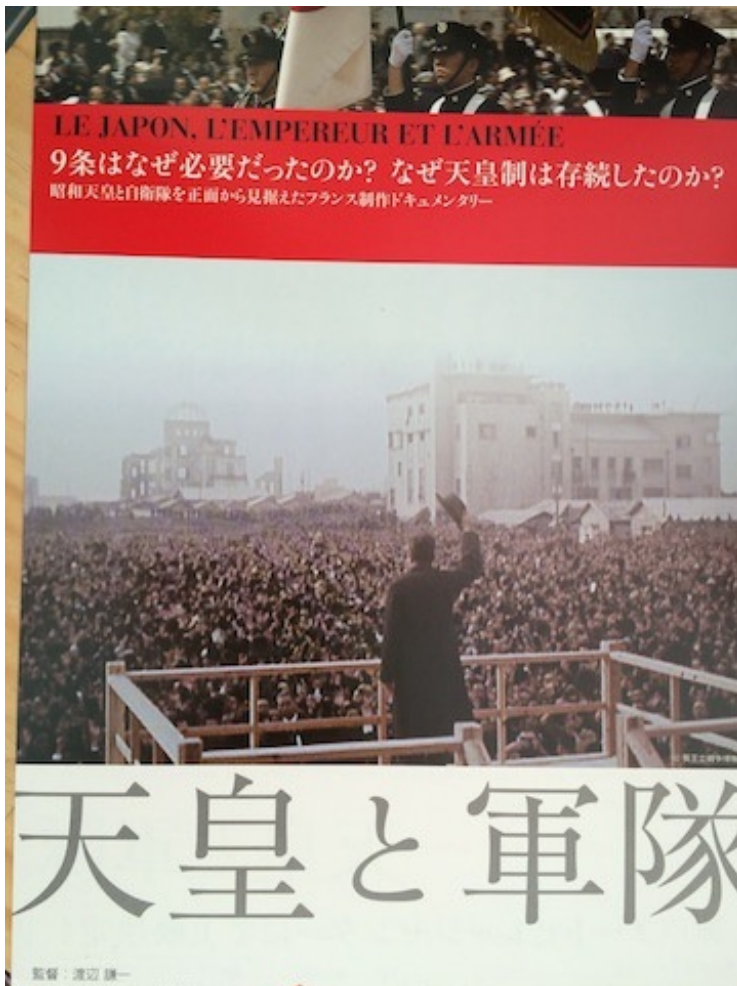
ご承知の通り、日本国憲法には表現の自由が謳われております。だからこそ、右翼も左翼も自由に好き勝手なことが言えるわけですし。そのお互いが放つ、言葉の持つ重みは「等価」つまりは、天秤秤にかけると釣り合うことが必要だと僕は考えます。

例えば左の天秤の皿に天皇についての「言論」をのせる。右に「エログロ、ナンセンスな言論」を乗っけてみる。これが釣り合う。それが表現の自由であろうと思います。「天皇」と「うんこ・おしっこ」「SEX」は同列に論じて構わないのであります。

本作はフランス制作と銘打っているわけです。

先の太平洋戦争で、直接、戦った国同士ではないので、そのあたり、第三国から客観的に天皇という存在をクローズアップできるのかな、と期待したのですが、監督は日本人でした。

やはりこれはフランス人など、外国人監督の視点で鋭く切り込んで欲しかった気がしています。本作は、太平洋戦争の終結。GHQによる占領、戦犯の逮捕、東京裁判、新憲法の成立。安保条約締結。高度経済成長へひた走る日本の姿、その中で天皇とは一体どんな存在であったのか？を描いたドキュメンタリーです。



90分の中にこれらの歴史上の重大事件を描くわけですから、それこそ教科書的にならざるをえないわけですね。一つ一つの出来事自体が、それこそ2時間あっても描き足りないぐらいの「歴史の重み」をもってあります。

その歴史の真っ只中を生きた元特攻隊員でもある、田英夫氏の言葉。また、新憲法の草案を七日間で作れと厳命された、元GHQ職員の女性の証言。様々な立場にいた人たちにとって、自分が放つ証言は、自分がかつて属していた組織の考え方や、逆にそれに対する猛烈な反発、それらが今も亡霊のようにそばに寄り添っているわけですね。かっこいい言葉で言うと「バイアス」がかかった証言になりかねない。

本作では右翼の論客である鈴木邦男氏にもインタビューを行っております。

はっきりと自身を「右である」と前提して、国のあり方や、日本特有の「天皇制」を論じることができる、数少ない論客でしょう。

その最たる人、ある意味「右のアイドル」的存在が「三島由紀夫」という存在だったと思います。本作では海外でも評価の高い三島文学、その作者が、なぜ市ヶ谷駐屯地で「花と散る」行為を行ってしまったのか？ をサラリと描いております。

かつて日本はアメリカと、無謀な戦争をやりました。ノーベル賞を受賞した日本のある科学者は言いました。

「それこそ”げんこつ一個”でやられちゃった」

それほどの惨敗でした。国力の違いを見せつけられてしまったわけです。

敗戦後の日本は、どの方向へ舵を進めるべきか？ 日本を占領したアメリカGHQ、そしてマッカーサーが着目したのが「天皇制」でした。

日本人の心の拠り所。その天皇を絞首台に吊るすのは簡単でした。

しかし、あえて天皇の首を刎ねることなく、日本の人心をまとめる「シンボル」として「活用」「利用」する価値が大いにある、と占領側は判断します。

その結果、日本国憲法には「主権は国民」にあるが、天皇はその主権を持つところの「国民の象徴」とであるとされています。



なお、本作では触れていませんが、A級戦犯の処刑された日。これは12月23日の未明でした。この日は何の日かご存知ですか？

そう、現在の天皇誕生日です。昭和天皇は、自分の長男の誕生日が来るたびに恐れおののいたでしょう。昭和天皇の誕生日ではなく、あえて未来の世代である、皇太子の誕生日にA級戦犯を処刑したこと。

「いつでもお前を吊るせたのだぞ、未来永劫、この日を忘れるな」というGHQの無言の圧力であったとおもいます。ちなみにA級戦犯の起訴日は昭和天皇の誕生日でもあります。

これはあくまで私見ですが、GHQは天皇制を叩き潰す意図を持っていた、しかし、マッカーサーの強い意志で存続することになった。少なくとも後世に、天皇制はGHQの支配下にあった、という意思表示を示したかったのではないのでしょうか？

これについて右寄りの人々は「けしからん」と腹をたてるでしょうし、だからこそ、アメリカに押し付けられた憲法を今こそ改正すべきだ！ と気炎を上げるのでしょう。

では、改正をして何をなさりたいのでしょうか？

元の「大日本帝國憲法」のような「天皇大権」を復活させるべき、ということでしょうか？

ある人々の考えは、アメリカからのしがらみから、真の独立を果たしたい。

そのための必要条件として、いざとなれば、他国と戦争ができるように法整備しておきたい。
しかし、よく考えていただきたい。

日本は資源のない国です。

日本の自衛隊ご自慢のハイテク兵器も「油」がなければ、ただのオブジェです。

それこそ、戦前の軍部を指導した人たちが唱えた

「精神力こそ無限のエネルギーである」という子供騙しな空理空論を謳い上げたいのでしょうか？

今のままでは、どう考えてもアメリカとの主従関係は断ち切る事はできないでしょう。

だから、アメリカが日本も軍事協力してくれ、と言われれば断れない。

それがいやで、アメリカと縁を切るなら、戦前の軍部のように、再び東南アジアへ進出しますか？

エネルギーひとつの問題だけでも、もう身悶えして考えなくてはなりません。

戦後の日本と天皇制、アメリカとの関係などを考える時、この東洋の辺境にある島国は、実に際どいバランス感覚で、綱渡りを行ってきたと言えるでしょう。

戦後70年の節目、この島国は今まで順調に保ってきたバランス感覚、その際どい綱渡りを行ってきた、という認識自体を失っているように思います。

この日本特有の歴史とつじつま合わせをやってきた天皇制、ないアタマをひねくりまわして、考えて、考えて、考え抜く自分の姿。ある作家は「あいまいな日本」という言葉を使いました。訳が分からない「あいまいさ」「あいまいな国」のあり方を、身悶えししながら、考えることこそ、日本人に課せられた宿命なのかもしれません。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 渡辺謙一

主演 田英夫、ジョン・ダワー、樋口陽一、小森陽一

製作 2009年 フランス

上映時間 90分

予告編映像はこちら

[「天皇と軍隊」予告編](#)

母と暮せば

母と暮せば

2015年12月29日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

失った人、失った時間

劇場で鑑賞してから、本作のHPを見てみました。

ああ、なるほど、と「微妙に納得」

井上ひさし氏には「[父と暮せば](#)」という作品があります。

宮沢りえさん主演で映画作品にもなりました。舞台は原爆が落とされた広島。ならば、二発目の原爆が落とされた長崎を舞台に、作品を作らねば……。

それが「原爆」という、人類史上類を見ない虐殺兵器を、作品のモチーフとして扱ってしまった作家の義務である、と井上氏は強く思ったことでしょう。未完のままで自分は死ねないのだ、広島を描いておいて、長崎に生きた人々を描かないことは、創作者として、けっして許されないのだ、という強い思いがあったのだと思います。

その井上氏の尊い遺志を引き継いだ形で、山田洋次監督自らオリジナル脚本を書き上げたようです。これは山田洋次監督としても、大変なチャレンジでしょう。

井上ひさし氏、お得意の戯曲形式。舞台劇を強く意識した体裁で、本作「母と暮せば」は制作されております。

映画を見慣れた方なら、お分かりになると思います。

本作の特徴は、なんといっても

「長セリフ」

に尽きると思います。

山田洋次監督は、日本映画界の巨匠です。映画の、ど素人である私が言うまでもなく、映画という芸術作品をどのように構築して行けばいいか？ そんなイロハは、もう「映画職人として」体に染みついているはず。

たとえば「ここは観客の皆さん、泣いてくださいよ」と「わざとらしく」センチメンタルに演出する。そういうことはしない人だろうと思ってきました。

ところが本作では、あきらかに「セリフによって」「泣かせよう」という意図が見え見えの演技があるのです。もうそれが「臭いぐらい」分かっちゃうわけです。

もう一点、長セリフに関連して

「説明セリフ」

の多用が本作では特徴的です。

作品を見ていて、まさか「あの」山田洋次監督がこんな稚拙な手を使ってくるとは?! と当初僕は仰天しました。

普通、映画の主人公が、作中の相手や私たち観客に思い出などを語る時、冒頭のセリフをきっ

かけにして、あとは映像として引き継ぎますよね。

たとえば「あのとき私は……」と主人公が語り始める。

そのあと回想シーンが始まる。

当時の風景。客船であろうが、鉄道の駅であろうが、映画ならなんでも登場させられる。

そこに生きた当時の人々の息づかい。その時代の衣装、服装。

その中でクローズアップされてゆく、劇中の登場人物。カメラはそこに寄って行きます。さあ、

どんなドラマが始まるのか……と、まあ、こういうのが典型的な回想シーンのやり方。

映画の魅力と、映画のもつ最大の説得力とは何か？

それは「時間と空間を切り取った”映像”を自由自在に編集できる」ことに尽きると思います。

どの時代の、どの背景の、どの人物の映像なのか、それを編集という映画特有のマジックにより、

一瞬で時空間を飛び越えることができます。

しかし、驚くべきことに、本作において山田洋次監督は、その映画文法そのものを、かなぐり捨て

ることに挑戦したのだ、と私は解釈しました。



本作の主人公は吉永小百合さん演じる福原伸子。長崎の原爆で医大生の息子、浩二を亡くし、悲嘆にくれる毎日です。

そこに、ある日あの世から、息子の浩二の幻が現れます。許嫁の佐田町子（黒木華）は今も無事であること。そして、母、伸子は、日々の暮らしでの想いを、浩二の幻を相手に語ってゆくのです。

本作において山田洋次監督は、前作「[小さいうち](#)」に引き続き、黒木華さんを抜擢しました。

僕は「小さいうち」を劇場で鑑賞しました。黒木華さんの、昭和初期の古風で丁寧な言葉使い

、イントネーションで話される「長セリフ」

これは実に魅力的でした。

彼女はこの作品で、第64回ベルリン国際映画祭最優秀女優賞を獲得します。

本作「母と暮せば」を構想するにあたり、山田洋次監督の頭の中には「黒木華」という女優の長セリフの気持ちよさ、佇まいのよさ、というのが大きな前提としてあったのではないかと僕は推測するのです。

長セリフをやめて、従来通り、映像で語る手法をとるのは「安全策」です。

映画製作50年以上のキャリアを持つ山田洋次監督にとっては、実にたやすいことであつたでしょう。

しかし、山田監督はあえて新たな冒険を試みています。

説明セリフでどれだけ映画作品が成立するか？

巨匠と呼ばれる映画監督が、未だに新しいことに挑み続ける、その姿勢こそ、本作の最大の見所なのかもしれません。

また、商売上手のちょっと怪しいおじさんを演じた、加藤健一氏の名演に拍手を送りたいと思います。

本作においては吉永小百合さん演じる福原伸子、また、黒木華さん演じる佐田町子の登場シーンにおいて、ほぼ回想シーンがないのです。全ての時間はもう、二度と過去に戻らないのです。歴史上起こった事件、戦争は、もう引き返せない。時間は一方通行なのだ、という当たり前だけど、大切なことを思い知らされるのです。

現実とは残酷なものです。

将来の残酷な結果を見たくなければ、時代の流れ、時代の節目に、しっかり立ち止まって考える勇気を持っていたいものです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 山田洋次

主演 吉永小百合、二宮和也、黒木華、浅野忠信、加藤健一

製作 2015年

上映時間 130分

予告編映像はこちら

2016・1月号 映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/103372>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103372>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103372>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ